

# 世界像のトポロジー試論

土井虎賀壽

*La beauté que concevaient les Grecs était l'Ordre rivé par l'Intelligence ; mais aussi ne s'adressait-elle qu'aux cer-  
veaux très cultivés : elle dédaignait les âmes humbles.*

Auguste Rodin.

## 序 詞

ゲシュタルト心理學の原理的な基本命題として『地と型』Grund und Figur に注目したのは數年前に遡り、舊稿知覺形而上學の問題』に於ては既にこの命題を形而上學的建築の中軸的位置にまで擴大して重畳化したところである。思へばゲルプが圖形成立の一例として指摘したこのさゝやかな事實がコフカによつて相當に原理的に採用されたとはいへ、これをゲシュタルト心理學の礎石の位置に置く心理學者があり得るとは當時の僕の念頭に宿り得なかつたのであつて、——従つてこの事實を單に心理學に止まらず形而上學的世界像の基本命題と成した時、僕は自分一人丈でこの道を切り開く覺悟をしたことであつた。然るに一昨年出版された『トポジカル心理學』の序言に於て、レヴィーンは——ベルリン大學でケーラーから心理學を教授された學生時代からして既に『地と型』をゲシュタルト心理學の基本命題と考へ、且つこの命題がトポロジーに於けるゾルダン曲線の構造に合同的事であることを發見して卒業後の十年近く

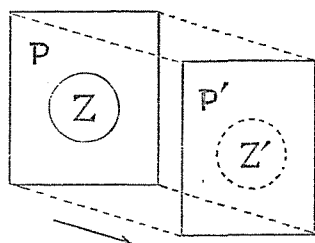
を全く數學的研究に没頭したことを告白してゐる。僕は僕の狙ひ所が必しも非科學的ではなくゲシタルト心理學の將來を雙肩に擔つたレヴィーンに一致したことに驚喜した丈けでなく、更に僕の道を進むための科學的方法として『トポロギー』を教示されたのである。

勿論レヴィーンと僕とは——斷るまでもなく學殖、名聲、學界の地位等一般に身分上の距離は問題外である——その素質と目標を異にしてゐるのであるから、レヴィーンとの一致は單に出發點に於ける立場と方法丈けに限られざるを得ないと思はれるのではあるが、併しそれ丈けで既に充分奇蹟的にさへ見える強力な先導者を發見した感動をもたざるを得ない。僕の生涯を學的企圖の方向で決定したものはレヴィーンのトポロギー的方法であり、僕はこの方法の獲得によつて今始めて學的研究の安定した地盤に立つたのであり——將來の努力と探求はこの地盤の安定感を基礎とした振幅をもつもののやうに思はれる。

それでレヴィーンから僕の學得した決定的な事實を先づ明確に分析記述してレヴィーンへの感謝を整理した上で改めて僕の道を踏み出したいと考へる。レヴィーンから獲得した原理的な問題は第一にはジョルダン曲線であり、第二には形相的な數學が特殊科學乃至内容的學問一般に對する關係の解明であつた。先づ第一の問題から採り上げよう。

ジョルダン曲線は『圓を一對、一對應をもつて連續的に映しとる映像 image, Abbild』として定義される。今白紙の上に畫かれた『圓』をその前面に立てられた鏡面に映すと假定しよう。その際『圓』の置かれてゐる白紙面Pに平行な鏡面P'には、圓ZのイメージZ'が映しとられるであらうが、——この際イメージは鏡面が平滑であれば嚴密に圓形を成すけれども、鏡面が凸面の時は横廣にひしやけた圓形になり、凹面の時には縦長にひしやけた圓形になるのみならず

上下左右が逆轉して映される。更に鏡面の底邊を軸として鏡面を廻轉し、或はその鏡面を左又は右にずらせるに従つていびつな圓形のイメージを得る。これらのイメージは如何にいびつであり又上下左右の配列順序が逆になつてさへるても——原の『圓』の各點を悉く残すところなく連續的に映しとつてゐるからして、その總ては『ジヨルダン曲線』で



第一圖

ある。かくしてジヨルダン曲線は、決して希臘人の要求するやうな端正さを原理とする圓形であるを要しない『不定の形相』をもつことが分る。のみならず今鏡面Pが白紙面Pからの距離を大きく引き離される時イメージZ'は段々に小さくなる。而もこのやうなイメージの悉くが矢張り、對一對應で連續的な『圓のイメージ』である。このことからジヨルダン曲線が『不定の分量』をもつことが明らかになる。ジヨルダン曲線はこのやうにして、形相と分量に於て不定であり任意自由な性格をもつ非ギリシヤ的或は超ギリシヤ的曲線である。

こゝで併し吾々は數學に於ける直觀が肉眼的或は感性的直觀とある限界内でだけ一致するものであることを注意し、且つ所謂數學に於ける直觀と論理との關係を明らかに置く必要をもつ。僕が只今ジヨルダン曲線を解説してその形相と分量の不定性を直觀的に把握しようとしたのは、上述の限界内では數學的直觀と感性的直觀とが一致することを利用して便宜上前者を後者に映して事柄を具體化したのである。従つて上述の條件の下でその極限の場合を検討する時この二つの直觀は明確に二つの異つた事柄として析出せられる。(一般に極限境位 Grenz-situation は普通の條件では融入して析出出来ぬ事柄を明晰に分離させる効果をもつ。それ故に極限境位即ち危機 Krisis が同時に分裂 Krisis

即ち區別、判定、決斷を意味するのは當然である。平和な時期に抱合し合つてゐた一つの集團が非常時局に直面して明確な輪廓をもつて左翼右翼自由主義に分裂する等はその一事例である。圓の置かれた白紙面の前面に鏡面を立ててイメージを映す前述の條件に於て吾々は二つの極限、鏡位をもち、その第一は鏡面の底邊を廻轉軸として鏡面Pを段々に寝かせていけば、イメージは進々高さをちぢめて最後には一つの直線になる。(鏡面を左或は右にすらせた極限ではイメージの幅がちぢまつて縦の直線になる。)第二の極限は、鏡面を白紙面から遠ざけていつた最後の段階に於てイメージが段々に小さくなつて、一點になる、ところで一般に數學的直觀にとつて曲線は點運動の軌跡として理解されるのであるから——『ジョルダン曲線』は「ある一點を出發點とした點運動(或は無限數の點系列)が或る空間距離を經過つて原の出發點まで辿り着く」ものとして理解される。平たく言つて「ぐるつと一巡する點運動の軌跡」がジョルダン曲線である。それ故に第一の極限たる『直線』も、第二の極限たる『點』も、——數學的直觀にとつてジョルダン曲線の極限である限りは(假令肉眼には直線と見え點に見えてゐても)直線でもなく點でもない。肉眼に直線と見られるものも數學的には極小の高さ或は幅をもつた巡廻運動を示し、肉眼には一點に見えても極小の空間域を經廻る點系列でなければならぬ。眞實の直線と點とは肉眼的直觀ではイメージの極限として連続的に成立するであらうけれども、數學的直觀ではさういふ連続性は成立しない。このやうに『直線』及び『點』が單に肉眼的直觀にとつてだけジョルダン曲線の極限の如くに見られ、數學的直觀にとつては決してさうでなく——ジョルダン曲線の極限としての連続性を許さないことは原理的に重大な事柄である。本論に於て西歐古代の世界像をジョルダン曲線の原型としての希臘的圓運動で幾何學化する際、この世界像との連続性を峻拒した西歐中世の世界像をカトリック的無限直線をもつて幾何學化し、

更に東洋の世界像を佛敎的點、移、行として映寫する筈であるが——かういふ幾何學的處置を基礎づけるものは數學的直觀にとつてゾルダン曲線、直線、點の三者が互に非連續な構造差異を示すことに淵源する。

\* この表現は例へばヘーゲルとかニイチェがまどらかな間を表象する時「αとβとが一つになる」などといふ言ひ方に従つたものであつて、數學的にはデーデキントの『連續の定義』によつて嚴密に言ひ換へらるべきものである。

一般にかういふ問題にかけては哲學者の論理は極めて鈍く、論理であるよりも表象であることが多い。數學を貫く細密な論理性を哲學に導入することは、哲學の論理化のためにも必然的要求である。本論參照。

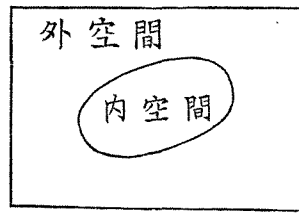
今肉眼的直觀と數學的直觀とが二つの極限で分裂することを見たのであるが、併しこの二つの直觀は論理性への係はりには於ても鋭く分離される。數學的直觀を肉眼的直觀及び神秘的直觀から嚴格に區切りとるものは實にその論理的媒介性である。これはあらゆる意味で原理的な事柄であるから少くもその源流にまで遡つて整理して置きたいのである。一體『數學』といふ日本語が恐るべき誤譯であつて數學の歴史を理解する妨害になることは少くも一應注意して置く必要がある。所謂『數學』即ちマテマティケーは希臘古代では廣く『學習』『學問』を意味し、プラトーン・アリストテレスの頃から狭く限定されては來ても、それが『數の學』であつた例はない。マテマティケーは何時も、トボス即ち空間の學とアリトモス即ち數の學を綜合した學問であつたのだし、又さうでなければならぬ。何故ならデーデキントが鋭く宣言するやうに Arithmetikung は論理化に外ならないに對して、空間學は何處までも直觀化でなければならぬからである。空間圖形の直觀動作と數の論理的展開——この直觀と論理を綜合する方學の場合がマテマティケーでなければならぬ。それ故にこそデカルトの『解析幾何學』の意味があるのだし、又現代數學に於て算術化即ち論

理化の極限たる『集合論』が直観的な『トポロギー』を要求しつつあることの理解も許されて来る。このやうに直観と論理が相互媒介する運動が數學の歴史をなし、又そこに総合的な數學の本質がなければならぬ。今この關係をもつと僕達の身近に引き寄せて來れば、幾何學的直観はベルグソンの『力學圖式』schemata dynamique に相應し、代數的論理はベルグソンの『イマジニ』l'imaginaire に相當する。外延的に擴大してゐる代數的論理を凝縮結晶させる時に見られる内包が幾何學的直観である。たゞベルグソンでは何處までも力學圖式を中心を置いてそこからイマジニを導來するのであつて、イマジニの外延的論理性が逆に力學圖式の直観性を精密化する方法として働く重大な役割を認めようとする。然るに數學に於てはこの直観と論理が兩方の側から相互媒介するところに本來的な機能が見られるのであつて、論理なくしては直観の數學的嚴密性は奪ひ去られ、直観なくしては論理の數學的展開性が硬直する。それは決してカントの『直観なき概念は空虚であり概念なき直観は盲目である』などといふ單なる形式と内容とのメカニカルな相補性ではなくて、もつと切實なダイナミカルな相互貫徹性であり、一は他なくしてはその生命が脅かされる底の抱擁である。

このやうに數學的直観が本質的に論理に媒介されてゐることからして、『圓のイメージ』たる Jordán 曲線の性格のなかに肉眼的直観では理解出来ぬものが出て来る。既にデカルトは無**限多角形**が決して感性的直観の對象たり得ないことを指摘してゐるが、圓周を無限多角形の極限として、或は一般に曲線を内接切線の極限として數學的に處理することは——遙かに遠く遡つて少くとも紀前三世紀のアルキメデス以來のことである。換言すれば少くともアルキメデスがパラボラの面積を算出して以來の數學的直観にあつては、多角形と圓及び Jordán 曲線は連続的につらなる

圖形である。といふことは、圓のイメーヂとして定義されるジョルダン曲線は、三角形、四角形等の多角形をもその實例として包含するのである。ジョルダン曲線のもつ『不定の形相』はこゝに到つて極まるのである。

このやうに『不定の分量』と『不定の形相』を本質的性格とするジョルダン曲線は、幾何學圖形として極めて廣大な外延を蔽ひその間を動くものであつて、——その内包をなす幾何學的意義は空間を内外の二部分に分割することにあり、何等かの面積をもつ空間域を自己内部に閉ぢ込め、残された空間域を自己外部に放逐するものがジョルダン曲線であつて、——内部空間と外部空間の境界線としての資格を必要にして且つ充分にもつてゐるところにジョルダン曲線の原理的なトポロギッシュな意義がある。レヴィーンが注目したのは實にこの點なのであつて、ゲシタルト心理學の『地と型』との合同的構造は否定せられ得べくもない。例へば紺地の上に白い紺絳が『型』として鮮明に浮き出てる時、この型をなす紺絳の輪廓を辿れば疑ひもなく一つのジョルダン曲線であつて、この輪廓内部に閉ぢ込められてゐる白い空間域とその外部の黒い紺地の空間域が明確に區切られてゐる(第二圖と第三圖とを比較せよ)。尤も第三圖の如き條件の下では、型が人間の注意の焦點

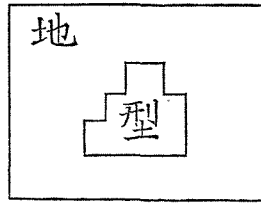


第二圖

となつて前方に浮き出し地の部分は型の背後に位置つけられる空間域をもトンネルして背後の空間全體に延び擴がつて見えるのであるが、——その場合にも型に閉ぢ込められた空間域が地の空間域から嚴格に區切られることに、變りはなく、たゞ問題が平面に於けるジョルダン曲線の問題から立體的に考へ直されるジョルダン曲線の問題に移されるだけのことである。尙ほ現實に切實な問題として『國家の版圖及び勢力』が本來的にジョルダン曲線を輪廓としてもち、

それがジョルダン曲線の資格を維持する限りに於てのみ『獨立國家』たることを豫め指摘して置かう。一般に『自我の自由獨立性』はジョルダン曲線の成立を必要にして充分な條件とするのである。

レヴィーンによつて開眼された第二の事柄は數學と特殊科學との關係である。實際レヴィーンのトボスの心理學は心理學の物理學化だといふ批難が屢々なされるのであるが、このやうな批判はむしろケーラーにこそ向けらるべきで



第三圖

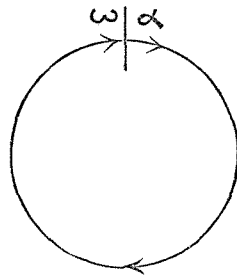
あつてレヴィーンに放たるべきものでない。數學は純粹に形相的であつてあらゆる内容を不定にしてゐる學であるから、それに物理的内容を盛り上げれば數學的物理学が成立し、心理學的内容で充たせば數學的心理學が成立するのであつて、トボスの心理學は心理學の物理学主義ではなく直接に數學の充實化である——といふレヴィーンの明晰な主張は少くも僕にとつて極めて重大な開眼的宣言として響いた。實際、數學の純粹形相性は内容を不定にするのみで決して内容を切り棄てたものでないことは充分留意されなければならぬ

い。若し數學が内容を切り棄てて成り立つのであるならば、それは絶対にあらゆる内容を絶縁せざるを得ないのであつて、物理学的内容との紐帯さへも許され得ないのである。恰もジョルダン曲線の形相及び分量の不定性が實は外延的にあらゆる形相と分量に延び擴がつてあらゆる形相と分量とを抱擁するやうに、數學的形相が内容を不定にしてゐることは——あらゆる内容を抱擁し、あらゆる内容充實を期待する姿勢を示すものである。數學的の分量が兎もすれば外延量の方角にのみ見られ易い爲めに、數學が特別に物理学と連帶するやうに見えるのであり、又歴史的事實としてさうであつたのではあるが、——併し數學的の分量は内包量でもあることに注目すれば人間學的内容が直接に數學的形



相を充實させ得ることは充分の權利と根據をもつてゐるのである。『空間の無限分割性』は必しも幾何學成立の必須條件でなく、空間分割がある限界單位で立ち止まることが許される——といふリーマンの思想を特にレヴィーンが注目してゐることは實にこの内包量及び人間學的充實の問題に係はるものである。吾々は更にこの問題に立ち入つた分析を下す必要と機會を持つてあらうと思はれる。

レヴィーンから學得した少くとも僕にとつて原理的な事柄は以上の二つに盡きるのである。僕の『トボスの世界像』の展開は全くレヴィーンの示唆によつてその出發點が與へられたのであるが、この出發點から踏み出される第一歩以



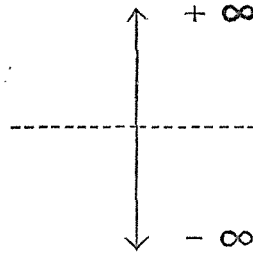
第四圖

後は全く僕の努力と生命に於て築かれ行く外はない。斷るまでもなく未熟な用意に躊躇しつゝあるのだけれど、本誌編輯者の御厚意に感銘して試論的に展開する覺悟を固めたのである。それで先づ僕のトボロギーの全體的概觀を記述して『序詞』を閉ぢ、扨て改めて『本論』第一部を展開しようと思へる。——

細密な分析と嚴格な區切りは『本論』に譲るとして、今先づ西歐の歴史を貫流する世界像を——古代的、中世的、近世的に三分することが許されるとすれば、この三つの世界像の『トボスのイメージ』は夫々に第四圖、第五圖、第六圖で示され得よう。

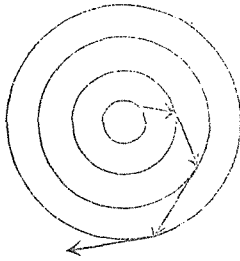
古代的世界像を希臘文化をもつて代表させ得るとすればそれがジョルダン曲線の原型を成す端嚴な圓形で映寫し得ることに異存はあるまいと考へられる。ヘーゲルの希臘像がさうである許りでなく、古典を典型するアリストテレスに於てエウダイモニヤ即ちカロス・カガトスの象徴は圓であつたし、希臘的宇宙像が球體であつたことに疑ひはな

い。たゞ後に本論でこの世界像の成立條件を分析する時に明らかめられるやうに例へばアリストテレースは出来上つた圓周を觀照し、プラトーンの如きは圓周産出の原理として特に中心と半徑を強調するがやうな相違が見出されるわけであつて、希臘的なるものが本質的に圓形的世界像を廻轉させつゝあることはむしろ自明な事柄に屬する。



第五圖

これに反して本來的な中世的世界像の誕生母胎である基督教的世界原理は、ジョルダン曲線の原型たる古典的圓環が、まどろかに連続させてゐた $\alpha$ と $\omega$ を絶对的に『切斷』して、 $\alpha$ を正無限大に位置つけ、 $\omega$ を負無限大に放逐した。『天堂』と『地獄』の二元性はかくの如くして成立し、——反對極に位置しつゝ反つて緊密な握手を交はしてゐたアポロンとディオニソスは、このユダヤ的『切斷』劍のために兩斷されて『神』と『惡魔』といふ奇怪な正負無限大に奇型化されざるを得ぬに到つた。中世カトリシズムを象徴するゴシック建築は正にこの正負の上下二無限大的バトスをもつて造形されてゐるのである。



第六圖

ルネッサンスに端緒する近世的世界像はその字義の示す通りに『古典復興運動』であり、まどろかな自然のもつ嚴正さの復活である限り、その基本モティーフを圓環運動にもつことは疑ひ得ない。たゞ併し幾世紀にも互つた中世的『奇型化』の痕跡と誘惑は拒否せらるべくもなく、爲めに圓環の出發點を成す $\alpha$ と歸着點を成す $\omega$ とがデーデキントの定義するが如き見事な極限的接觸を保ち得ずして—— $\alpha$ から始められた圓運動は現實に(即ちデーデキント的

極限性を破つて)αに重複し、かくしてαに重複した利那にまどらかな圓運動から撥ね反されて『切線』の方向に直線運動を開始し、而もこの惡無限的直線運動は古典的基本モチーフによつて或る一點から新らしき圓運動に移動し、この新らしき圓運動が現實に終結する、利那再び切線の方向に直線運動を起し、かくて無限に圓運動と直線運動とが交互代置的に無限系列を成す(第六圖)。今はたゞ概観してゐるのだからこのやうなトポスのイメージが如何なる根據で近代的世觀像を映寫するに必要にして充分であるかを説明することが必要でもなく又出來もしないのであるが、ヘーゲルが自己の世界像を『圓の圓』Kreis der Kreise であると主張した事柄を——漠然とした哲學的表象から嚴密な數學的論理で代置すれば第六圖が成り立つことを主張するに止めよう。實際ヘーゲルが自己の哲學を數學的イメージで表現する時には極めて漠然とした自覺をしかもたぬのであつて、或る場所では自己の立場を『圓の圓』であると主張してゐるかと思ふと、他の場所では單に『圓』であると表現して恰も原の希臘的世界像と同一であるかのやうに書き止めてゐる。このことは、第一にはヘーゲルが希臘的なるものへの一向に熱烈な愛情の結果純粹に希臘化出來たと思ひ込んだ純情に基くのであり(吾々はヘルダーリンに於て或は又一般にあらゆる優れて新鮮な古典復興運動に於て同じ現象を見出す)、第二には論理的分析によつて『圓』が『眞無限』であり『直線』が『惡無限』であることを論證し得た結果ひたむきに眞無限を追及して惡無限をひたすらに排斥しようとしてヘーゲル自身の歴史的境位が惡無限を媒介にしてゐる歴史的事實を忘却したことから由來するのである。だから人々はヘーゲル解釋に於てヘーゲルを『圓』で表はさうとしつつそれだけで落ち着けないで色々苦心をするのであつて、ある人々の如きは渦巻即ち螺旋でヘーゲル的なものを表現しようとしてゐる。併し少くも數學的訓練を経ればこのやうな螺旋が如何に非ヘーゲル的であるかに氣附く

筈である。螺旋は肉眼的直観にとつてこそ圓形への類似を示すけれど、このやうな類似は數學的直観にとつては文字通りに全く無意味である。何となれば螺旋の兩端を採つて引つ張ればそれは直ちに直線なのであり、數學的に云へば直線と一對一に對應する「直線のイメージ」に外ならず——數學的評價に於て全く直線に『等價』なのだから肉眼的直観の非數學的類似に眩惑されてヘーゲルの基本モテーフたる眞無限とは全く反極的な惡無限に轉化して了つた『螺旋』的ヘーゲル・イメージは全く奇怪である。惡無限たる直線に若干の曲率を與へた丈けで出來、従つて數學的構造に於て全く直線と本質を等しくする螺旋でヘーゲルを數學的に表現しようとするのはヘーゲルの基本モテーフの没却であり、そんなことだと最初から細工をしないで單純な圓形に止まる方がヘーゲルに忠實なる所以であらう。直線は「曲率零の曲線」なのだから曲率の變化は數學的イメージとしての『等價性』を保證するものであつて決して等價性を轉換する根據たり得ないのである。直線と等價な螺旋で若し假りにヘーゲルの數學的イメージが成り立つのであれば、結局中世とヘーゲルの近世が等價になり、従つて中世から近世への歴史的發展は皆無だといふことになる。少くとも折角數學的イメージを求めながら、中世から近世への歴史的發展のイメージを等價即ち歴史的停滯のイメージで置き代へた事になる。若し近世が今猶ほ中世と同じ社會相、同じ世界觀で動いてゐるといふ立場でだとそれで正しいであらうが、少くとも何等かの本質的轉換を近世的なるものに元出し得るとすればそれでは數學的に正しいイメージでないと言はねばならぬ。細密な論證は本論の仕事であるが、第六圖の示すところは——近世的世界像の何處をとつても圓形であつて（無數にある同心圓を一つ一つとり出して比較すれば互に等價な圓である）ヘーゲルが自己の世界像を單純に『圓』だと言つたのはその限り正しい。そして實際ヘーゲルの辯證法的世界像のどの斷面を切り取つて見ても實にま

どろかな圓運動を見せせてゐる。たゞ世界像の始と終り即ち危機點に於て丈け『惡無限』が醜惡な姿を見せて人々を脅かす。ヘーゲルの辨證法に於てもある辨證法運動がまどろかな圓運動を終結したと思つた刹那に破綻が姿を現はして今終結した許りの圓運動の軌道からぐつとそれて了ふ。そして或る地點から再び——先の圓運動よりは内包外延共に増大した新しい圓運動が開始される。結局、近世的なるものは古典的圓運動を基本モテーフとしつつ、その各危機點に於て中世的直線運動に面接し、而も古典的基本モテーフの優勢力によつて再び擴大された圓運動に移ることを——數學的イメージとして一對一對應連續的に映し探つたのが第六圖である。而して中世的惡無限は、恰も太陽に近接した彗星の尾の如くに、古典的基本モテーフによつて曲けられてゐるのである。

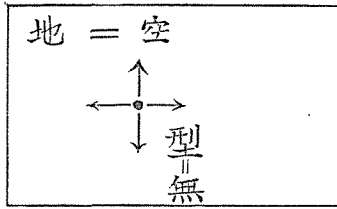
西歐歴史發展の概觀的イメージは以上の如くに考へられると信するのであるが（本論の根據づけまでの間は單なる確信として主張するに止まる）、東洋の世界像を描かないでは僕の企圖が結論に到るまでの通路を缺くことにならざるを得ない。然るに凡そ謎の如きたゞよへる空圍氣が東洋的であるらしいので、嚴密さを求める數學的直觀像にとつてはこいつが一番苦手であるやうに思へる。併し例へば孔丘の『述而不作』が示すやうに、或は大乗佛敎の發展が『進歩でなくて單純に開展』であるやうに（『思想』昭和十三年十月特輯號所載拙稿『大和的なるもの世界的律動』參照）——東洋的世界像は少くも原理的要求としては東洋古代の聖賢の道等價に墨守することを特色とするやうである。尤もエジプトとかペルシヤ等所謂近東諸國のことは悉く本論に讓つて今は全く除外して置く。東洋的世界像が歴史の上下を通じて少くとも原理的には等價であることを特質とするのであれば、——數學的イメージはこれらの等價な各時代に對應する無數のイメージの中で最も明確に東洋性を示すイメージを取り出すことが數學的處置として最もふさはし

く又最も美しい。そして支那的世界像よりは佛教的世界像の方が、地理的にも歴史的にも内包外延共に大きい支配力をもつてゐるやうに思はれるから、——この概観的序詞では最も明確な佛教的世界像のトボスのイメージを描いて置かうと思ふ。今僕が特に『最も明確な佛教的世界像』といふ言ひ方をした時僕の頭の中をひたひたと波打つてゐたものは實に鋭烈な次の一句なのである。——

『無の片片は空を道取する標榜なり、

空は無を道取するの力量なり。』

第七圖



今のところこの道元の一句が最も明確な佛教的世界像を——特に西洋的世界像一般に對

照的な姿勢で——吾々に示してゐると思ひ、又これだけで充分に本質的な佛教的トボス・イ

メージを描き得るからそれ以上を求めないのが數學的經濟原理にふさはしからう。道元の

トボス像は第七圖で示される。中世基督教的世界像がジョルダン曲線の原型たる古典的世

界像の圓形を『絶待切斷』して、肉眼的直觀にとつてジョルダン曲線の第一の極限であると

見えた『直線』を畫いたに相應するかのやうに、佛教的世界像は肉眼的直觀にとつて第二の

極限であると見まがうた『點』に集約する。基督教的『直線』も佛教的『點』も——一般にジョ

ルダン曲線が内部に閉ぢ込めてゐた空間域を解放減却して出來上る世界像であつて、共に

境界即ちベラスを否定して明確な形相を破り、人生像として一般に『自我』を滅じさせ『國家』の成立根據を奪ひ去つ

たことに於ては軌を一にする。併し基督教的『直線』はその兩端に於てこそ正無限大の雲表に聳え負無限大の地下にも

ぐつてゐるとは云へ、そして又その兩無限大への運動の情熱を示すとは云へ、——中間に有限な線分として目に見え、る型を残してゐる。然るに佛教的『點』は恰も白紙の上の黒點の如く極めて印象的に鮮明な型であり、つゞ大きさを否定して、無型であり、その一點を凝視した瞬間に凝視された原點は消え去つて隣の點が鮮明な姿を現はし、——かくして刻々に『點』刻の移動が見られる。『事々無礙』と稱ばれるものはこの點移動に外ならぬのであつて、而もこの點移動——即ち、定位置に安住することなき一所不住の『無的點』の『無的無礙移行』を道取するものは外ならぬ『空』たる地の力量なのである。一般に西歐の歴史を貫通して決定的だつたものは『型』なのであつて、『地』はたゞ型を成立させる消極的條件にしか過ぎなかつた。然るに佛教の世界像に於ては『地』たる『空』そのものが、『無礙神通なる無型的型』を成立させる力量をもつ源泉なのである。而も地たる『空』は單なる『空』としては道取し得ない本質をもち、必ずその力量によつて動き止まぬ『無的點』の無礙神通の姿を『標榜』として（即ち『無型的型』として）のみ覺悟される。道元的『標榜』が『無型的型』といふ無的本質をもつた『型』となつて『空』たる『地』の力量を示すところに——一般に西歐的なる世界像の『地』型形態構造の逆轉を喚發したことは注意せらるべき最重要點である。

而して吾々にとつての現實的な又血族的な最大事を成す『日本の世界像』は、『大和的なるもの』の世界的律動を原理的出發點として——あらゆる時代を通じて『世界公開的』でありつつ、一天萬乘の皇統連綿たる御事實が示す通りに各世代に於て『大和的完結性』を示してゐる。それが如何なるトボスのイメージを持つかは『トボスの世界像』の結論であるが故に、本論に於けるトボスの世界史の細密な分析を準備としておのづからに結實し來るべきことであつて最早や『序詞』の斷續を許さない。（序詞了。一九三八・一二・二五・生年三七）